
やっぱり僕は猫が好き。

神田春希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やっぱり僕は猫が好き。

【Nコード】

N9336H

【作者名】

神田春希

【あらすじ】

僕は猫が好きだ。愛していると言っても過言ではないくらいに。……でも、僕は猫に嫌われている。そんなある日、父さんが猫のリアを家に連れてきたんだ。

「^{わたる}渉。見て御覧なさい。

とってもかわいい猫ちゃんよ」

かあさんはのんきに笑ってみせる。

僕はちらりと肩越しにその猫を見る。

確にかわいい。

アメリカンショートヘアのメス。

名前はリリア。

彼女は僕の家茶の間のタオルケットの上で、規則正しい寝息を立てて寝ていた。

そもそもの発端はこうだ。

昨日、急にとうさんが猫を連れてきた。

なんでも、急に海外出張が決まった上司の猫らしい。

たまたまその人の家の近所であった父さんが、一軒家に住んでいて、

家族が動物好きだったから、という理由だ。

なんて適当な理由だろうか。

まあ、一番世話をするであろうかあさんが、

かなり乗り気なのが、今回の一番の要だったんだろう。

はあ、

僕はため息をつく。

実のところ僕は、猫が好きだ。
ものすごく好きだ。

もう、愛していると言っても過言ではないくらいに。

あの、流れるような曲線。

丸く大きな瞳。

華奢でしなやかな体。

僕は、柔らかな毛並みを撫でる自分を想像し、
思わず悦に入る。

——しかし、僕は猫に嫌われている。

猫は僕を見ると、フンッと鼻を鳴らし逃げる。

それはまるで、僕のことを煩わしいと思っているかのように。

餌をあげようとしても、ぱっと居なくなってしまうのだ。
フレイメント

僕は傷つき、寂しく思う。

あんなに愛しているのに、野良猫すら僕を避けて通るのだ。

何が悪いのだろうか、

猫の嫌がる匂いでも発しているのだろうか？

色々考えてみたけど、全く理由が分からない。

とにかく、僕は猫に嫌われている。

僕はリリアに触れることなく、自分の部屋に行く。
ベッドにごろりと横になって、何気なく猫の雑誌を手にとった。

ぺらぺらと雑誌をめくると、

そこには愛狂わしいほどの、たくさんの猫の写真がずらりと載っている。

僕は思う。

この写真を撮ったカメラマンになりたい、と。

たくさんのかわいい猫たちに囲まれて、なんてうらやましい職業だろうか。

僕は写真の猫たちを指で優しく撫でる。

これが、僕の今出来る精一杯の愛情表現だ。

かなり独りよがりだが、こればかりはやめられない。

嗚呼。

さつき寝ていたりリリアのあの柔らかかそうな毛並みをなでればよかっただろうか。

寝ているのなら、僕が触れても気が付かないのではなかったのか。そんなことを思って、僕はふうつとため息をついた。

その時だった。

『なにやってんの』

ふいに声を掛けられて、僕はびっくりした。

振り向くとそこに居るのは猫。

さつきまで茶の間で寝ていた、あのリリアだった。

no.2

まさかね、と思い僕はきよろきよろと声の主を探す。
猫が話をするはずがない。

するとまた、その声が聞こえてきた。

『アタシが喋ってんの、やっぱり分かるのね』

そう言って、声の主は僕の目の前にちよこんと座った。

「リリア?!」

僕は心臓が止まるかと思うくらいびっくりした。

なぜなら、僕の目の前に猫が自らやってきたからだ。

ああ!

なんて素敵な猫だろう。

僕は思わずうっとりと見つめる。

『あんだ。なんでびっくりしないの?』

やっぱり、アタシの言葉、わかんないの?』

リリアは首を傾げた。

言葉なんてこの際どうでもいいのだ。

猫が喋ろうと知ったことではない。

僕は思わず、リリアに話しかける。

「あのさ、君に触れても、いい?」

リリアはびっくりした顔を見ると、きっぱりとこういった。

『いやよ』

僕はがつくりと肩を落とす。

『あんだやっぱりアタシの言葉がわかるのね』

リリアは尻尾をぴんと伸ばしながら言う。

「そうだね。」

でも、これ、僕の夢なんだろう」

僕はがっかりして、目を足元に伏せながら話す。

そう、これはきつと僕の夢だ。

だって猫が話をするはずがない。

僕が猫を撫でたいと思ってベッドに横になるから、うつかり見てしまった夢なのだ。

『夢？』

リリアは大きな目をことさら丸くした。

そして大きな声で笑う。

僕は猫ってこんなに笑う生き物なのだとな少し感心した。

そしてリリアは、急に僕の頬に、猫パンチを食らわせた。

あまりに突然の猫パンチ！

しかし、痛みよりも先に、僕はリリアのピンクの肉球に心を奪われていた。

なんてきれいなピンクの肉球！

あの、肉球をぶにぶにしたらどんな感触なんだ？

さ、触ってみたい！

そんなことを考えていた僕に、リリアははつきりとした口調で話す。

『あんだ、これはゆめじゃないわよ。』

現実よ。げ・ん・じ・つ！』

上目遣いで僕を見るリリア。

僕は猫パンチされた頬をゆっくりと撫でる。

「現実……」

そう呟いては見たものの、全く実感できない。

そんな僕を知ってか知らずか、リリアは話を続ける。

『あんだ、猫界でかなり有名みたいよ。』

猫の言葉が分かる人間ってことで』

「え？ そうなの？」

僕は吃驚した。

猫と話したのは今日が始めてのはずなのに、
なんで猫界で有名になってるんだ？

僕の疑問を解きほぐすように、リリアは説明してくれた。

『あんだ、近くに誰もいないはずなのに、誰かの声を聞いたことない？』

しかも返事したこと、あったでしょ？』

そういえば、そういえばそんなことあったな。

確か二、三年くらい前の話だ。

その日、僕は『お化けが出る』という、近所では有名なボロ家に友達と肝試しをした。

その時、確かに、なにかの声を聞いた。

ちりちりという鈴の音と、子供の声。

最初はてっきり友達がからかっているんだろうと思って、

かなり馬鹿でかい声で返事をしたんだ。

「なんだお前たち、知ってるんだぞ！」

そんなことしても、僕はだまされないからな！」

……そんな事も言った気がする。

お化けだったらどうしようと思いつつ、僕はまるで余裕があるかのように喋った。

足はがくがくと震えて、僕は本当はものすごく怖かったんだけど。

その後、その声は『逃げろ！』といったかと思うと、

屋根裏をばたばたと駆ける音とともに聞こえなくなったんだ。

友達じゃなかったってのを後日知り、

てっきり僕は『アレ』だと思っていたんだけど……猫……だったのか？

「もしかして、ボロ屋での話？」

『ボロ屋？』

アタシはよく知らないけど、猫界では有名な集会所よ。

時々近所の悪ガキが入ってくるから、そういう時は脅かしてやるんだって。』

リリアは腕の辺りを毛づくろいしながら話す。

『集会所の話の後……なのかな？』

子猫たちが電柱の影からこっそりあなたに向かって話しかけたら、あなたその子達に受け答えしたみたいじゃない。

だからみんなあなたのこと、避けて通ることにしてるみたいよ。

もつとも、子猫たちは度胸試しってことでわざわざあなたの前を通ったり、

話しかけたりしてるみたいだけど。』

「なんで?!」

『え?』

「なんで僕のこと避けて通るんだ？」

僕はこんなに猫たちのことを愛してるって言っのに！言葉が分かったからって、何だっただ？」

僕は長年の疑問をリリアにぶつける。

リリアは僕をじろりと見ると、にやあと笑って答えた。

『きまってるじゃない。』

あなたが近くにいと、にやあにやあ甘えているとき、なんて言っているかばれちゃうからよ。』

「……それだけ？」

『それだけって……あんた馬鹿?!』

あたしたちにとって、結構死活問題なのよ。

大体あたしたちがそういう時、なんて言ってるか知ってるの？」

リリアは目を少しぎらつかせて僕を睨んだ。

「い、いや。知らないけど……」

僕が来るとすぐ逃げてしまう猫たちの声を僕が聞けるわけないじゃないか。

そうリリアにいいそうになるのを我慢する。

うつかりリリアを怒らせてしまったては、猫に触れるという僕のさやかな野望が成就されない。

僕がしおらしくしていると、リリアは鼻をフンッと鳴らして僕の耳にこっそり話しかけた。

『そついう時つてね、

結構悪口言つてたりするのよ』

彼女の息が、僕の耳をくすぐる。

そう——なんだ。

でも、それくらいで？

僕は別ににやあにやあと甘えている猫たちが、

悪口を言っているにもかまわない。

それどころか、僕の近くにいてくれるのであれば、

どんな罵詈雑言を言われてもいいくらいだ。

『あんたがもし、他の人間に喋って、そのことが伝わったとしたら、色々面倒くさいのよ。野良だっているし、飼われている猫も飼い主がなんて言うか……。まあ、とにかく。』

触らぬ神に祟り無しってやつ』

リリアはそういうと、尻尾をくにやりと曲げて、僕の頬を撫でる。柔らかな毛並みの尻尾に、僕は思わずうっとりとした。なんて気持ちがいいんだろう。

「リリア、僕は本当に猫が好きなんだ。

だから、猫が嫌がることなんてしないし、これからもするつもりないよ」

僕はリリアの尻尾の感触に、思わず目を瞑った。なんて、なんて気持ちがいいんだろう！！

嗚呼。

触れたい。

撫でたい。触りたい！

僕は我慢の限界だった。

「リリア！」

と彼女の名前を叫ぶと、右手で彼女の喉の辺りを撫でる。

『ちよっと！ まだ良いつて言ってないわよ！』

そう言っつて、僕を睨みつけるが、彼女は次第にうっとりとした表情になり、

喉をごろごろと鳴らし始めた。

今まで伊達に「猫雑誌」を見ていたわけじゃない。

猫が気持ちよくなる場所はすでに習得済みなのだ。

—— 実際触ってみるのは初めてなんだけどね ——

『仕方ないわねえ。』

その代わり、マタタビを買ってきて頂戴？

それと、高級猫缶。

金色のラインが入ってるやつね。

青いラインのは絶対買わないで。

あれ、あんまり好きじゃないの。』

ごろごろと喉を鳴らす彼女は、かなり我侭なことを言っている。

しかし僕はそんなことは些細なことだと、このときは思っていた。

そう、この時は、だ。

『ねえ、ワタル。』

アタシの肉球触る？ 』

猫のリリアが、僕に猫なで声で話しかける。

僕はリリアを見ないように「別にいい」とだけ言った。

リリア、お願いだから、僕にかまわないでくれ。

そんな思いも空しく、リリアは僕に話しかけてくる。

『アタシがいいって言ってるのよ？』

ほら、ワタル』

そう言つと、リリアは僕の目の前で横になり、わざと肉球を見せ付ける。

ピンクの肉球がとても綺麗だ。

ぷにぷにの肉球に、思わず心を奪われた。

——嗚呼。僕ってなんてだめなニンゲンなんだろう——

僕は欲望の赴くままにリリアの肉球に触れる。

ぷにぷにとした感触は、僕の予想を裏切らず、いや、予想を遥かに超えた最高の感触だ。

『気持ちいい？ ワタル』

「うん。とっても——」

僕は肉球を触り、悦に入っていた。

それにしても、なぜ僕の手には肉球がないんだろうか。

もしあったら、僕は間違いなく触り続けるに違いないのに。

そんなことを思っていると、リリアはうっとりとした声を出しな

がら僕に話しかける。

『ねえ　ワタル。

アタシね、今度はキャットタワーが欲しいの。
ちよっと大きな目のやつ。

ねえ——いいでしょ？　』

それが、今回の狙いか……。

あの日——僕がリリアと話をしたその日から、僕はリリアの我侭につき合わされっぱなしだ。

一度は断った。

でも、断ると、今度はリリアに触れることすら出来ない。
リリアが触らせないのだ。

今までなら、写真で満足できていたんだけど、

さすがにあの毛並みに触れてからは、僕はもうそんなもので満足できなくなっていた。

やはり所詮は紙だ。

本物には勝てない。

仕方なく、僕はリリアの我侭を聞く羽目になっている。

リリアに触れることに僕のお小遣いは見る見るうちに減っていった。

なんて我侭な猫なんだ！

性悪猫め！！

僕は肉球を触りながら、もう片方の手でリリアの喉を撫でる。

リリアは気持ちよさそうに、目を瞑って、喉をごろごろと鳴らした。

——嗚呼。なんて可愛いんだろう。
我儂な性悪猫であつても、
やっぱり、やっぱり僕は、猫が好き。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9336h/>

やっぱり僕は猫が好き。

2010年10月8日14時58分発行